

徳川みらい学会第2回講演会

朝鮮通信使と家康

東海地方朝鮮通信使研究会代表

貫井正之氏



徳川みらい学会第2回講演会を

2018年6月19日(火)、静岡県

男女共同参画センター「あざれあ」

大ホールで開催。東海地方朝鮮通

信使研究会代表の貫井正之氏が

「朝鮮通信使と家康」をテーマに講

演しました。6月19日は徳川家康

公が清水港で朝鮮通信使をもて

なした日で、毎年、朝鮮通信使講

演会を開催しています。貫井正之

氏の講演要旨は次の通り。

(文責：企画広報室)



南聖重詩書 第8回(1711年)使節の書記・南聖重は、清見寺にて第6回(1655年)使節の父で従事官・南龍翼の遺墨と対面して感涙にむせぶ。56年の歳月を経ている。聖重は「清見寺に泣いて遺韻に次す」と書を残す。所蔵：清見寺。ユネスコ「世界の記憶」登録。

清見寺の資料48点が「世界の記憶」に登録

朝鮮通信使に関する記録が、ユネスコ「世界の記憶」に登録されました。

3世紀にわたって日本と朝鮮が平和外交を続けたことは、アジア全体の平和につながり、世界史で例を見ないことです。今日の混乱する世界情勢の中では、歴史の教訓になります。

登録運動は、日本の朝鮮通信使縁地連絡協議会と韓国の釜山文化財団という2つの民間団体が中心になって進めました。私は日本側の学術委員の1人です。

遺産登録の条件は真正性、つまり原書であることです。清見寺は、扁額にした原書を保存しており、48点が遺産登録されました。

秀吉と家康の統治政策

なぜ、秀吉は朝鮮を侵略したの

でしょうか。戦国時代1000年を

経た豊臣政権は、膨大な武士団を

抱えており、国内を統一すると、彼

らに与える領地は無くなり、また、

武士による収奪で耕作地は

疲弊し、豊臣政権に反感をもった

民衆による大規模な一揆がおこり

ます。国内を維持できなくなった

豊臣政権は、海外に領土を求めて、

これらの矛盾を解決しようとした

のです。

家康は、秀吉とは逆の政策を行

います。武士層の削減(大名の改

易)で領地のアンバランスをなくし、

大規模灌漑、埋め立てで耕地面積

を拡大し、生産の向上、農業技術

の開発を江戸初期に精力的に行っ

て、日本の自給自足体制を確立し

たことにより、徳川の200年以上

にわたる平和な時代を実現しま

した。

朝鮮通信使への道を開いた伏見会談

なぜ、秀吉は朝鮮を侵略したの

1603年に江戸幕府を創設した家康は、その2年後に松雲大師と伏見で会談します。朝鮮の主張は、①秀吉の朝鮮侵略が誤りであったことを国書で出すこと、②国王の墓を暴いた犯人を出すこと、③日本に拉致した6万人の朝鮮人を返すこと。家康は、この3条件を受入れます。その2年後、朝鮮通信使は日本にやってきます。招聘費用は100万両で幕府の年間予算の5分の1にあたります。

秀吉の朝鮮侵略の後で、朝鮮国王は「朝鮮は不幸にして日本を隣国とした」と言いました。家康は不幸な隣国関係を友好親善の隣国関係へつくりなおしました。

しかし、明治維新以降また不幸な隣国関係をつくってしまった。いまこそ、歴史の教訓を朝鮮通信使から学ぶ必要があると思います。「徳川の平和」という言葉があります。これは朝鮮の平和でもあり、アジアの平和でもあります。その間をとりもつたのが朝鮮通信使であることが、今回の「世界の記憶」登録で、世界に認識されました。この意義は大きい。貴重な資料を保存して、現在につなげている静岡に学ばなければならぬと痛切に感じております。